

”Reflection” in Shelley’s Prometheus Unbound

吉野, 昌昭

九州大学比較社会文化研究科国際社会文化専攻・国際言語文化講座

<https://doi.org/10.15017/8594>

出版情報：比較社会文化. 3, pp.141-147, 1997-03-01. Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



Prometheus Unbound における“reflection”の効用

吉野昌昭*

キーワード：詩劇，イメージ，反射，内省

... Man, who was a many-sided mirror
Which could distort to many a shape of error
This true fair world of things — a sea reflecting Love;
Prometheus Unbound, IV. 382-4

Prometheus Unbound の終盤近くで The Earth が喋る台詞の一部を、やや断片的な形で引用になることを恐れずにエピグラフとして掲げた。それは、「愛」という主題への言及があるためでもあるが、人間は汚れない真実の世界をいろいろ「歪めて」しまう「多面鏡」だという「鏡」のイメージに注意を引きつけたからである。この詩劇の主題は大まかに言えば、「愛」の力による「真の美しい世界」の再生であろう。そしてまた、この劇は Prometheus と Asia が人間世界の「誤りの姿」を正し、再びもとの美しい世界を回復するまでの過程を、「多面鏡」、「歪曲」、「反射(反映)」のイメージを用いて検討している。以下、拙論は、主題・内容の展開と技法・手段の関連を“reflection”という観点から探るものである。

I

「深い真理は像(イメージ)を結ばない」(II.iv.116)と Demogorgon が Asia に答える場面がある。思想、情熱、理性、意志、想像力、また恐怖、狂気、犯罪など哲学的、道徳的問題を取りあげて、こういったものは一体どこから生じるのかと問う Asia に対して Demogorgon は始め“God”, “Almighty God”または“Merciful God”といった漠然とした答へを返してくる。が、最後にいたって「深い真理」を具体的なイメージによって伝えることはできない、と答える。この「真理」は、Shelley が強い関心を抱いていた neo-platonism にいう「一」(“the One”)の観念、すなわち永遠の相にかかわるものであろう。が、それに加えてこの Demogorgon の言葉は、*Prometheus Unbound* の劇

作術についても示唆するところが大きい。つまり、「結ばない」という「像(イメージ)」を敢えて結ばせようとする試み、「深い真理」という対象に迫るプロセスそのものがこの詩劇の眼目である、と Demogorgon の言葉は示唆している。Prometheus と Asia が「真理」の像(すがた)をいわば徐々に刻みあげていく過程・プロセスが重要なのである。

したがって、この詩劇は Allegory (寓意) といったレベルのみで解釈できるものではない。Prometheus を人間の精神の — 作者は Jupiter をして Prometheus を“The soul of man”(III.i.5) と呼ばせている —, Jupiter を悪の、そして Asia を愛の象徴と見なすことが誤りだというのではない。寓意的要素を評価することは却って作品の構造を明らかにすることにつながる。ただ、Prometheus は正義や意志を表し、Asia は Intellectual Beauty を表すといった解釈を増殖し、寓意を無数に求めるのみでは意味はない。大地や月また時間などの擬人化、さまざまな spirit の登場など、作品全体の印象は古風であっても、登場人物が単一の観念と結びつくほどに単純な作品ではない。⁽¹⁾ その点、Prometheus 一人が「人間の精神」を集中的に表わしているのではなく、「人間の精神」は Prometheus に Asia と Jupiter を加えた計3人の人物の間で分かちあわれているのだという指摘は、⁽²⁾ この劇の可能性を拡大した指摘として評価できる。それは、作品を寓意の枠から解放し、少なくともそれに神話・myth としての位置を認め、そこでの目的は「劇的な行動」の展開にあって抽象観念の説明ではない、と示唆しているからである。劇の焦点は個々の登場人物の性格から人物たちが展開する行動へと移行する。知性・理解力・悟性など人間の合理的精神を表す Prometheus

* 国際社会文化専攻・国際言語文化講座

と、情熱・想像力など人間精神の情的な局面を表す Asia と、習慣・専制政治・迷信など人間社会の諸悪を表す Jupiter の行動が劇の関心となるのである。勿論、これと関連して、彼らの置かれている状況も注目される。Prometheus と Asia が不自然に切り離されている事実は、状況が Blake 的な意味での「墮落」の支配下にあることを意味するから、⁽³⁾ その意味ではこの劇の眼目は、二人がこの状況を克服するためにどのような行動をするかという点に見いだすことができる。ただし、付け加えておかねばならないこととして、ドラマといえるようなドラマは第 1 幕ですべて終了し、Demogorgon による Jupiter 追放も含めてそれ以後の「行動」には、さしたる対立も緊張も見られないこと、Prometheus が呪いの撤回という精神的な決断をした後は、通常一般の意味での「行動」は認められないということがある。⁽⁴⁾ 劇の実質的な行動は、「深い真理」の像（すがた）に迫る Prometheus と Asia の二人の精神的行動へと、道徳的認識という行動へと質的に変化する。

ところで、Shelley が「精神に創造することはできない、知覚するのみである」(“Mind, as far as we have any experience of its properties, and beyond that experience how vain is argument, cannot create, it can only perceive.”)⁽⁵⁾と述べたことは良く知られている。我われの精神が「創造」することはない。我われの知覚の対象は、人間精神の及ばぬところで創造されたものだ、というのである。では、我われの精神は専ら受動的にしか機能しないのかと言うと、必ずしもそうではない。例えば、作品“Mont Blanc”が例証となるが、精神は対象に働きかけ十分能動的でもあるのだ。永遠の世界に属する、抽象的な「力」(“Power”) — 例の「深い真理」と言い換えてもよい — が、事物の世界に属する「川」の姿をとって (“Power in likeness of the Arve” l.16) 峡谷を流れくるとき、その川（事物）に Shelley の精神が働きかけ、両者間に交渉・交流が生じる。

My own, my human mind... passively
Now renders and receives fast influencings,
Holding an unremitting interchange
With the clear universe of things around; (ll.37-40)

「力」には直接触れることは出来ないにしても (“Power dwells... / Remote, serene, and inaccessible” ll.96-97), 「事物・もの」を介して「力」と間接的な交渉をもつことは可能である。精神から力への働きかけは認められるのである。

「深い真理」に戻ることにしよう。この場合にも、「真理」と Prometheus との間で、または「真理」と Asia との間で

交渉・交流が成立しうるのである。*Prometheus Unbound* というテキストは、真理の「像・イメージ」を確定しようとする「精神」の働きを、その過程を定着したものである。

II

「深い真理」は像（すがた）をもたない。始め、主人公 Prometheus には、彼が接近を図るべき対象の、その靡げな姿すらも掴めていない。そこで、彼が先ず求めるのは呪い — Prometheus の Jupiter に対する呪い — の内容の確認である。が、その確認も、肉薄すべき対象または発見すべき「真理」にどう繋がるのか、または繋がらないのか判然としない。それは Prometheus 自身にも分からないことであり、また逆に、主人公の問題意識がそのように無定形であるがために、それを定形化する「発見のプロセス」がいっそう作品 *Prometheus Unbound* を面白くしているとも言える。問題の呪いは、海や山や風など自然（と、その spirit）が“a treasured spell” (l.184) として秘めている。しかし、自然のものたちは Jupiter の怒りを買うことを恐れ、彼 Prometheus にその内容を明かそうとはしない。彼の耳には“whisper”のごときものが感じられても、それは意味をなすまでにはいたらない (l.132)。彼と自然との交流は途切れ、彼は孤立状態にあるのだ。そういう彼に向かって The Earth が示す地下の世界・死者の国は、“reflection”の世界である。そこには彼 Prometheus の姿 (“his own image”) が、あたかも鏡に映しだされたかのように浮かんでいる (“There thou art, and dost hang, a writhing shade / Mid whirlwind-peopled mountains.” l. 203-4)。地下が地上のすがたを映すのである。ついで Prometheus は、地下から呼び出した亡霊、つまり「自分の姿」から、願いどおり呪いの内容を知る。また同時に、その呪いを発した時の自分がいかに傲慢、敵意、憎悪、絶望に取りつかれていたかを知る (l.258-60)。いま、インディアン・コーカサスの山に鎖で縛られている Prometheus は、この鎖から解き放たれる前にまず、呪いという鎖を自分の手で断ち切る必要がある。彼が呪いにこだわるのは — それが彼の自覚的行為であったか否かは問わない — , 呪いの撤回が自縄自縛から解放されるための条件であったからである。そして、肉体的苦痛に苛まれながらも、劇の最初の段階ですでに彼は呪いを撤回する心境にある。

Disdain? Ah no! I pity thee. — What Ruin
Will hunt thee undefended through wide Heaven!
How will thy soul, cloven to its depth with terror,
Gape like a Hell within! I speak in grief,
Not exultation, for I hate no more,

As then, ere misery made me wise. —The Curse
Once breathed on thee I would recall. (I, 53-59)

Prometheus は「憐れみ」と「悲しみ」を知った。これは、無定形な自己を規定していく上での第一歩を踏み出したということである。

さて、彼の性格規定に最も関与してくるのがイエスである。憎しみを捨て、呪いを撤回する Prometheus には、人間に対するイエス的な愛を認めることができる。Wasserman を始めとしてすでに多くの評者が指摘しているように、Shelley は明らかに新約聖書の記述を踏まえて Prometheus の造形化にあたった。イエスは Prometheus のいわば鏡像である。インディアン・コーカサスの氷の岩山に「釘で打ちつけられ」(“Nailed”I.20)、氷河の氷の「槍で突き刺され」(“The crawling glaciers pierce me with the spears”I.31)、「傷」(“wounds”I.39)を負い、「青白い足からは血」(“the blood/From these pale feet”I.50-51)を流している、このイメージが多くを語っている。また、イエスが十字架にかけられたとき地震が起き岩が割れた⁽⁶⁾ように、Prometheus が暴君 Jupiter を呪うと嵐や地震が起き、世界が揺らいだとされる。イエスが十字架に架けられると「昼の12時から地上の全面が暗くなった」⁽⁷⁾というが、Prometheus が呪いを吐いたときにも「暗黒が血のように昼を」覆うのである。⁽⁸⁾しかし、イエスとイメージを共有しても、自らの呪いに縛られている限り、人間の救済者としては Prometheus はイエスに及ばない。Jupiter の暴虐に苦しめられてきた者たち — 大地、人間、大気 — すべての救済は Prometheus の成熟度にかかっている。Prometheus の側に真の救済者として意識が確立しない間は、The Earth からもみな彼にならって「呪い」は正しいと評価する (I.163-79, 185)。尤も Prometheus が呪いを取り消し、怒しを全面に押し出してもなお、The Earth はそれを Prometheus の敗北と誤解し、悲しむ (I. 306-11) が、それはむしろ Prometheus に The Earth らに対する指導力が期待されていることを示唆する。いずれにしても、Prometheus はイエスの「愛」の精神を体得しなければならないのである。

Prometheus がイエスであるとすれば、furies を使って Prometheus の攻略を図る Jupiter は当然のことながら Satan に当たる。が、Jupiter に「叡知と力」(“wisdom, which is strength,” II.iv.44)を与え、「広大な天の支配」を任せしたのは、元はといえば Prometheus である。Prometheus は、人間には生まれながらにして知識、力、技術、哲学的思索力、愛の原理による生き方が権利として保証されるべきだと信じていた。だから、彼は人間の尊厳を守るという大義のために、“Let man be free”を唯一の条

件として Jupiter に世界の統治を委ねたのである (II.iv.35-46)。そして、Jupiter に裏切られ孤独と侮蔑のただ中に押しやられてからも、Prometheus はその悲惨な状況から逃げることはせず、むしろ悲惨な体験をくぐり抜けるなかで「賢明」(“wise”I.58)になったと自ら認めるのである。「賢明」の内容は必ずしも明らかではないが、フランス革命の不本意な結末がイエスに苦悩をもたらしている (I.567-77) という設定 — これはイエス=Prometheus の図式を再確認させる — から判断するならば、それは政治や権力の非人間性の認識と幾分かは関係があることだろう。しかしまた、Asia が“To know nor faith nor love nor law, to be/Omnipotent but friendless, is to reign.” (II.iv.47-48) という痛烈な認識を示しても、なお Prometheus は人間の可能性を信じ、イエスの崇高な愛の精神を回復する使命を拒まないことも事実である。⁽⁹⁾ このイエス的な態度も賢明さに少なからず関わるものであろう。“Evil minds/Change good to their own nature.” (I.380-1) という Prometheus の言葉は言外に、正しい精神によって“evil”を“good”に変えることは可能なのだという Shelley の信条を伝えるものである。いずれにしても、Prometheus の認識の在り方がイエスのそれに近いことを確認しておきたい。

Prometheus の努力は最終的には、人間存在のあるべき形の発見につながるはずのものである。が、それ迄の間、彼の信念を切り崩しかねない危機的な状況がなかったわけではない。Fury たちの攻略 — 彼女たちが出現するときも地上は闇で覆われる (I.440-1/523-4) — を受けたときが、その一つである。Fury のコーラスが、イエスの教えに従い信仰の道に入った“The wise, the mild, the lofty and the just” (I.605) が墮落したことを、そしてイエスが悲しんでいることを語る (I. 542-63)。額から苦しみの血を流すイエスの姿を見て Prometheus が“O horrible! Thy name I will not speak,/It hath become a curse.” (I.603-4) と口走ると、Fury がそれに追い打ちをかけて、イエスの言葉 (Luke:23-34) を巧みに織り込みつつ人間の絶望的な状況をいっそう強調する。

The good want power, but to weep barren tears.
The powerful goodness want: worse need for them.
The wise want love, and those who love want wisdom;
And all best things are thus confused to ill.
Many are strong and rich, —and would be just,—
But live among their suffering fellow men
As if none felt: they know not what they do. (I.625-31)

Fury (= Jupiter=Satan) のこの説得で、Prometheus の

信念は危うく覆えられそうになる。実際、イエスを「呪い」と見なして否定するならば、彼は再び、以前の自縄自縛の状態に逆戻りしてしまう。ここは、彼がもっとも追い詰められた危機的状況である。⁽¹⁰⁾しかし、すでに Jupiter に対する呪いを乗り越えた Prometheus (=イエス) が再び低い次元に舞い戻ることはない。Satan とその手下がつきつける苦しみを、彼の魂は「忍耐」をもって切り抜ける。

だが実は、ここにひとつのパラドックスがある。というのは、Fury たちは Jupiter の命を受けてやってきたことになっているが、彼女たちは実は存在していない。彼女らに実体はないのである。彼女らは Prometheus の内面の葛藤と苦悩が顕在化したものに過ぎず、彼の“reflection”でしかない。彼の苦悩がなくなれば彼女らも消滅する宿命にある (L.467-72)。彼女らが持ち出した光景は決して「実在の姿」の提示ではない (“no types of things which are” I. 645) のである。これは、*A Defence of Poetry* の一節に見られる Shelley の基本的な考えと関連があるだろう。すなわち、“All things exist as they are perceived: at least in relation to the percipient. ‘The mind is its own place, and of itself can make a heaven of hell, a hell of heaven.’ But poetry defeats the curse which binds us to be subjected to the accident of surrounding impressions....”⁽¹¹⁾という考えである。先に Prometheus の「賢明」に関連して、精神が善を悪にも、またその逆にも変えようという Shelley の考えに言及した。今ここでも同様の主張がなされている。「悪」も含めて事物が「存在」するのは、われわれの精神がそれを「知覚」する限りにおいてである。つまり、(悪を例にとるならば、)悪は絶対的、自律的な存在としてあるのではなく、あくまで「知覚されたもの」として、観念として存在するに過ぎない。しばしば引用される“Note on *Prometheus Unbound*, by Mrs. Shelley”の次のコメントは分かりやすい補足となろう。夫人に言わせれば、“The prominent feature of Shelley’s theory of the destiny of the human species was that *evil is not inherent in the system of the creation, but an accident that might be expelled ... mankind had only to will that there should be no evil, and there would be none.*” (イタリックスは筆者)⁽¹²⁾である。「知覚されたもの」でしかない「悪」の追放を実現するためには、人間の精神がその方向で働かねばならない。Jupiter に力を与えたことを悔やみ呪っている間は、Prometheus の精神状態は「地獄」に等しいものであった。が、「呪い」を捨てたとき、彼は地獄を「天国」に転じえたのである。⁽¹³⁾ Jupiter にすべてを委譲したときに、Prometheus がただひとつ留保したものが「意志」であったことを思い出す必要がある。精神とほぼ同じ意味合いの「意志」は、これを譲り渡すならば、Shelley

の思想は瓦解することになる。

以上のような、ある意味で optimistic とされる信念は、他方で Shelley が作りあげていた「原型」の概念とも関係がある。「原型」とは即ち、“the ideal prototype of everything excellent or lovely that we are capable of conceiving as belonging to the nature of man”のことである。⁽¹⁴⁾ *Alastor* の序文 — これは *Prometheus Unbound* の序文としても十分通用する — を援用しながら、このことに簡単に触れておきたい。先ず、序文 (の一部) の要旨は、おおよそ次のとおりである。*Alastor* は、人間の精神のある状態をアレゴリーの形式によって描いた作品である。純粋な感情を持ち、また冒険心に富んだひとりの若者が「想像力」— それは、すでに優れたもの、荘厳なものに触れることで純化された想像力であるが — に駆り立てられて、宇宙 (universe) についての思索を重ねる。外的な世界としての宇宙は壮大で美しく、無限で計り知れない、と彼は知る。また彼の精神はその崇高さを認める。だがほどなく、「外的な対象」 (“external objects”) だけでは飽き足らなくなり、自分の「精神」 (“mind; intelligence”) に「類似した」 (“similar”) ものへの憧れを強めていく。彼はこころのなかで、愛する存在 (the Being) を想像し、それに出会うことを強く望むのである。彼自身が知性、想像力、感覚のいずれにおいても優れているがゆえに、その彼に似ている「存在・vision」は当然のことながら賢明で美しい。こうして主人公 *Alastor* は、彼のこころの「原型」 (prototype) に拠って、その原型に対応するところの「対型」 (“antitype”) を探し求めることになる。彼は、理想化した自分の姿を他 (の人) に求めるのである。⁽¹⁵⁾

Prometheus も基本的には、*Alastor* のように純化された想像力の持ち主である。もともと不死身の体であるから、*Alastor* のように輝く乙女の vision を追って死にいたるということもないが、美しい人間性を信ずる点で彼は *Alastor* とともに Shelley の信念を代弁している。*Prometheus* と *Alastor* は自分の「原型」に従い、誠実に行動するのである。その行動の過程を映す鏡の役割をはたすものが、時に亡霊であり、また時にイエスなのである。いずれにしても *Alastor* と *Prometheus* はナルキッソス — 泉の水に自分の姿を映した — の系譜に属するものたちとすることができよう。⁽¹⁶⁾ さて、Prometheus の真の姿は最終的には Panthea の夢のなかに映し出される。

...his pale, wound-worn limbs

Fell from Prometheus, and the azure night

Grew radiant with the glory of that form

Which lives unchanged within, and his voice fell

Like music which makes giddy the dim brain

Faint with intoxication of keen joy: (II.i.62-67)

イエスは悪魔の誘惑を退け、また十字架から降ろされたのちに蘇る。Prometheus もイエスのように、その本質は「不変」(“unchanged”)であり、その“the overpowering light/Of that immortal shape...shadowed o'er /By love” (II.i.71-3) という性質が失われることはない。

ところで、Panthea の主体性は希薄である。彼女は Prometheus と Asia の間をとりもつ使者・messenger であり、Prometheus にとっては Asia の影 (“shadow”II.i.70), Asia にとっては Prometheus の影 (II.i.31) である。しかし、Prometheus=イエスとの関連において、即ちキリストの transfiguration のコンテクストのなかで見ると、彼女は使徒としての位置づけを得ることになる。(17) Prometheus との交渉は夢のなかの神的な出来事として、しかし性的なイメージを伴って、Panthea の口から“I saw not—heard not—moved not—only felt/His presence flow and mingle through my blood/Till it became his life and his grew mine” (II.i.79-81) と語られる。Asia は彼女の眼をのぞき込み、Prometheus のメッセージを読み解き、いずれ自分たち二人が再び結ばれるであろうことを確信する (II.i.124-6)。(18)

Asia が Prometheus との再会を確信する一方で、Prometheus も Asia との別離 (Jupiter の支配下にある人間の不幸な状態、Blake の墮落) を克服し、『新約』の「愛」の理念を獲得した。それは、上述したような Shelley の「認識」の哲学と「原型・対型」の哲学に支えられて始めて可能であった。呪いの放棄と「愛」の精神の回復、そして悪の世界の崩壊から次には、Asia を主人公とする踏み込んだ議論が展開されることになる。

III

Prometheus の自己確立が一応終了したところで、劇の主演は Asia に移る。彼女は Jupiter の「悪」や「虚偽」(I.127) を問題にしつつ、哲学的な思索を深めていく。というのも、Asia も当初の Prometheus と同じように、いや、それ以上に自己形成の方向が決まっていない amorphous な存在だからだ。そして、彼女が哲学的な思考を続け、自己達成にむけて進もうとする際に、彼女の相談相手として登場するのが Demogorgon である。この人物は「一つのもの」(“... there is One pervading, One alone, II.iii.79), 「永遠なるもの、不死なるもの」(“the Eternal, the Immortal, II.iii.95), また宇宙を統べる「力ある法則」(Demogorgon's mighty law, II.ii.43) の具現者として位置づけられているが、肉体と精神のいずれにおいても漠として捉えど

ころがなく、amorphous であることにおいては Asia と変わらない。漆黒の玉座にあるときの彼の姿は

... a mighty Darkness

Filling the seat of power; and rays of gloom
Dart round, as light from the meridian Sun,
Ungazed upon and shapeless—neither limb
Nor form—nor outline; (II.iv.2-6)

である。彼は Asia のさまざまな疑問にたいしても積極的な答えは与えない。いくたびか“God”という一語をもって答えに代えた挙句に、「神とはだれのことか」と詰め寄られると“I spoke but as ye speak—” (II.iv.112) とだけ述べて、それ以上には踏み込まない。しかも、彼は「闇」であり、Asia はその姿かたちを見ることすらできない。だが、Prometheus が“reflection”の策を用いて最終的な自己に到達したように、Asia が思考力を深め自己を完成するには、彼女にも自分の姿を映しだしてくれる鏡、つまり Demogorgon が必要なのである。そして、Demogorgon に自分の姿を映す (“reflection”) ことは、彼女の「内省」というにひとしいのである。二人の「対話」がうまく噛み合わず、Demogorgon の答えが漠然としているとすれば、それは Asia 自身の意識が低いところに止まっているためである。最後には、「永遠の愛」(“eternal Love”II.iv.120) だけが運命・時間・偶然・変化 — 即ち、人間の世界 — を超越する力であると Demogorgon が示唆し、そしてそれは彼女の認識でもあるのだ。人間の世界の「悪」(“Evil, the immedicable plague” II.iv.101) は、Saturn (=Kronos) の時代が到来してから、つまり、人間が「時間」のくびきに繋がれてのちに発生した。人間社会を悪の支配下から救いたそうとした Prometheus と共に、Asia は「悪」を根源にさかのぼって究明し (II.iv.100-109), 人間救済への道をつけようと試みたのである。対話の終わり近くで彼女が認識した「愛」の力は、Prometheus の認識を補強するものである。二人がおなじ結論に達したところで、悪の象徴である Jupiter は完全に追放されることになる。

さてここで、Asia が Demogorgon と出会うまでの経緯を、“reflection”の視点から振り返ってみよう。発端は、Panthea が「忘れてしまった」といった二つ目の夢である。第1の夢の発信者が Prometheus であるのに対し、こちらの夢の発信者は Asia と考えられる。Asia は眠り、夢をみたが、その本人がそのことを忘れていたために、常に受動的にしか行動しえない Panthea にはほとんど何の記憶も残っていなかった。しかし、二人で語り合ううちに (II.i.127-42), Asia は「Panthea の忘れた夢」とは実は、「わたし自身の忘れていた眠り」(II.i.142) のことであったと気

づく。その夢のなかで響いていた“Follow, follow!”という声は外ならぬ Asia のところの中から発せられた声であるが(この pattern は *Alastor* のそれと同じである)、彼女はその声を追って森を通り泉を周り、山や谷を抜け、さらに spirits から“To the Deep, to the Deep,/Down, down!”(II.iii.54-55) と誘われるがままに Panthea とともに Demogorgon の洞窟に降りていく。Demogorgon との対話が行われるのはその後のことである。ついでながら、夢のなかに現れた、ぼさぼさの髪、荒荒しい目つきの者(II.i.127) は Jupiter の没落と Prometheus の解放をもたらす「必然性」(“necessity”)を表していると考えられる。⁽¹⁹⁾ また、「発せざる声」(“a voice unspoken”II.i.191) は Jupiter の没落と新しい時代の到来を告げる声であるが、これは最後に Spirit of the Hour が法螺貝を使って世界中に響かせることになる。この法螺貝も Asia の婚礼の祝いの品であり(“that curved shell which Proteus old/ Made Asia’s nuptial boon, breathing within it/A voice to be accomplished”III.iii.65-67), その声が発せられるか否かは Asia (と Prometheus) 次第である。Demogorgon が“If the Abyss/ Could vomit forth its secret: —but a voice/ is wanting, the deep truth is imageless;” (II.iv.114-6) といったすべての理由はここにあった。「声」は、Asia は勿論のこと人それぞれが自分の心のなかに求め、実現させるほかないものなのだ。

Jupiter やその手下の者たちの場合は、「理想の原型」(“ideal prototype”)を欠いている点が致命的である。寓意の要素に留意し、Prometheus は善の部分を受けもち、Jupiter は悪の象徴であるという点に注目するならば、後者が本質的に「理想」とは無縁であることがいっそう明らかになるだろう。Demogorgon の姿をとって現れた Jupiter の息子が、情け容赦なく彼 Jupiter を破滅へ追いやるのも自然な成り行きである。ここでは Jupiter の息子 = Demogorgon は Jupiter の精神の反映であり、破滅の原因は Jupiter 自身にある。当然、Jupiter と Thetis の世界も、Prometheus と Asia のそれとは対照的に設定されている。Jupiter は、「情欲の光り」に身を包んだ妻 Thetis(III.i.34-35) がみごもった子どもの誕生を「受肉」(“incarnation”III.i.46) と呼ぶが、Prometheus = イエスの世界の言葉が使用されることで却って、ここにはアイロニカルな意味が生じている。彼がイーダの山から拉致してきた美少年 Ganymede の酌で飲む酒も、Prometheus = イエスの酒と著しい対比をなしている。Prometheus という「葡萄酒」には、それを受ける Asia という「黄金の杯」が用意され、明らかに Biblical なコンテクストに置かれた二人の関係を通じて人間救済の可能性が示唆されている(“Asia! who when my being overflowed/Wert like a golden chalice

to bright wine/Which else had sunk into the thirsty dust.I.809-11). Prometheus は、イエスに具現された最も崇高な精神の在り方を継承している。それは Asia を通じてひろく人間に伝えられるべき精神である。⁽²⁰⁾ これに対して、Jupiter という酒には肉体的な渴きを癒す以上の力はない(IV.350-2)。Jupiter の側にたつ者たちは Demogorgon の洞穴から立ちのぼる「神託の霧」(“the oracular vapour”II.iii.4)に接しても、それをも“maddening wine of life” (II.iii.7) として飲みほし、狂乱の極みに走る。「理想の原型」を欠くものは善をも悪に変えてしまうからだ。

ところで、混沌とした深淵“Abysm”から上ってくる「神託」の「声」(II.iv.115) とは、直接ユダヤ・キリスト教に基づいた創造神話の声のことではない。⁽²¹⁾ それは“Mont Blanc”にも響いていた声のことで、束縛や圧政など(“Large codes of fraud and woe”, “Mont Blanc” I.80) の「掟」を糾弾する声である。愛の精神をうたい、人類平等と人間個人の権利の擁護を叫び、と同時に、偽り、高慢、奢り、嫉妬などを退ける『新約』的な声である。⁽²²⁾ 最終的に Asia は、Demogorgon の言う神とは「永遠の愛」のことであったと知る(II.iv.120)。Demogorgon との対話を通じて、彼女は「神託」は人それぞれが自分の心のうちに聞くべきものである(II.iv.123) と悟る。Demogorgon の台詞、“I spoke but as ye speak”は、このようなコンテクストで発せられたものであった。

Prometheus の予言、すなわち“the prophecy/Which begins and ends in thee (=Prometheus)”(I.690-1, 706-7)についても同じことが言える。Prometheus が絶望の淵にあったときに、「美しい精」(“fair spirits”I.658) が愛の世界への希望をこめて告げる「予言」は、彼自身の本質的な部分から無意識のうちに発せられたものであり、いずれ彼の手で実現されるべき予言である。「美しい精」は彼の「薄暗い洞穴」(“the dim caves of human thought”I. 659), 即ち頭脳から生じた「思想(思索)」の精たちである。恐ろしい、汚らわしい姿をした furies が「忌まわしいすべてのものを生み出す Jove の頭脳」(I.448) から生まれ出たものであるのに対し、こちらは Prometheus の prototype を源泉として生じ、「無限の大気のなかを雲のように自由に移動する」(“We (=spirits) make there, our liquid lair/ Voyaging cloudlike and unpent/Through the boundless element”, I.687-9) 精である。この人間の精は世界を変革する力を帯びた、Shelley の思想を集約的に表す精である。⁽²³⁾ 彼らは第 4 幕で再度登場し(IV.81. 93-128), 人間の理想的世界の基盤となる最も重要な「力」として、感情、思索、愛、叡知、芸術、そして学問などを挙げる。

無論、Prometheus と Asia にも限界が、ということは

Shelley にも、限界があるということになる。Prometheus と Asia は、精神の優位性を認め、「悪」は「愛」によって追放できると考える。が、主役以外の、例えば The Earth のような登場人物の主張を通じて Shelley は一定の留保をしていると感じられる。Prometheus と Asia との物理的・精神的距離の変化を人間、鳥獣、草木の相貌の変化として映し出す The Earth は、無論、彼ら二人の合一・理想世界の実現をつよく望んではいた。しかし一方で、The Earth は、不死の存在である Asia に「死」(mortality)を教え、穏やかに繰りかえし移ろう季節の美を教える(III.iii. 114-23)。人間はいかに理想の状態に近づいても、“chance and death and mutability”(III.iv. 201)を免れることはありえないし、また“Labour and Pain and Grief”(IV. 404)からも完全に解放されることはない、と The Earth は述べる。たしかに Jupiter は破滅したが、Asia がすでに知り得たとおり、彼は「悪」の根源ではなかった。その意味でも Shelley は、本源的な悪の存在を完全には否定しえないままである。⁽²⁴⁾

しかし、そのような限界は、作品 *Prometheus Unbound* の限界ではない。Prometheus と Asia、そして彼らの「行動」の正当性を保証する Demogorgon、この三者が極めて密接な内面的関連のもとに、互いが互いを映しだしつつ繰り広げる劇のプロセスが、作品をしてその種の思想的限界を越えさせている。“reflection”は「反射」、「反映」といった単なる現象ではなく、彼らの「内省」を促し、彼らを更なる精神的行動へと進める役割を果していたのである。

注

テキストは特記した場合を除き、D.H.Reiman & S.B.Powers eds, *Shelley's Poetry and Prose* (A Norton Critical Edition, W. W.Norton & Co., 1977) に拠った。

(1) Earl R.Wasserman, *Shelley: A Critical Reading* (The

Johns Hopkins University Press, 1977), pp.256-7.

- (2) Frederick A.Pottle, “The Role of Asia in the Dramatic Action of Shelley's *Prometheus Unbound*” (in *Shelley: A Collection of Critical Essays*, ed. by George M. Ridenour, Prentice-Hall, Inc.,1965, p.133.)
- (3) *ibid.*, p.141.
- (4) Wasserman, *op. cit.*, p.306.
- (5) *On Life* (*Shelley's Poetry and Prose*, p.478.)
- (6) Matt. 27: 51
- (7) Matt. 27: 45, 日本聖書協会訳『聖書』(1982)による。
- (8) Wasserman, *op. cit.*, p.296.
- (9) *cf.* Wasserman, *ibid.*, p.297.
- (10) *Shelley's Poetry and Prose*, p.154, note 4.
- (11) *ibid.*, p.505. なお同様の趣旨は *On Life* にも見られる。
- (12) *The Poetical Works of P.B.Shelley*, ed. Thomas Hutchinson (London: Oxford U.P.,1908) p.267.
- (13) Ross Greig Woodman, *The Apocalyptic Vision in the Poetry of Shelley* (Canada: Univ. of Toronto Press, 1964), p.126.
- (14) *On Love* (*Shelley's Poetry and Prose.*, pp.473-4.)
- (15) *do.*
- (16) Stephen Spender, *Shelley* (Longmans, Green & Co.1952), p.35.
- (17) Wasserman, *op. cit.*, pp.298-9.
- (18) Asia の Panthea (=夢) 解説は、Prometheus の場合とおなじ“reflection”の手法によって行われる。また、Shelley は Panthea の目—“dark, far, measureless”な球体 (II.i.116-7)—を宇宙の metaphor としている。彼女の目を読むことは、Prometheus の未来のみでなく宇宙の未来を予知することである。
- (19) *Shelley's Poetry and Prose*, p.163, note 3.
- (20) Wasserman, *op. cit.*, p. 297.
- (21) Ross G. Woodman, “Metaphor and Allegory in *Prometheus Unbound*” (*The New Shelley* ed. by G. Kim Blank, Macmillan, 1991), pp.167-8.
- (22) Matt. 5: 37 なお、第3幕最後の Spirit of the Hour のことばを参照。
- (23) Frederick A. Pottle, *op. cit.*, p.368.
- (24) Melvin M. Rader, “Shelley's Theory of Evil” (in *Shelley: A Collection of Critical Essays*, ed. by George M. Ridenour, Prentice-Hall, Inc.,1965), p.105.